



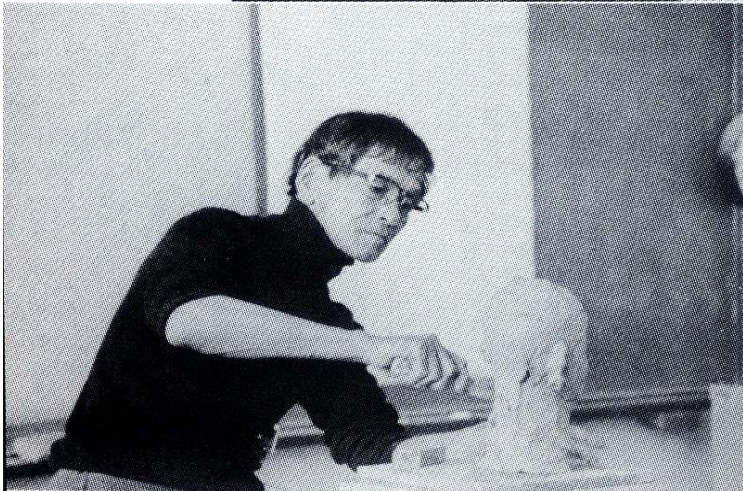
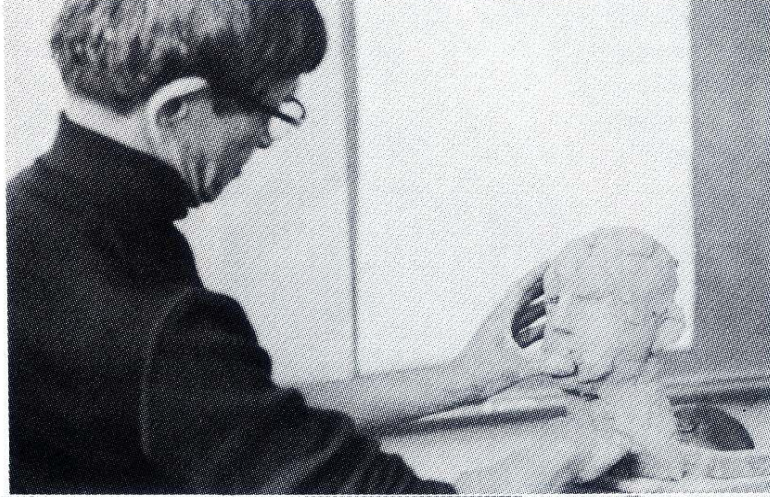
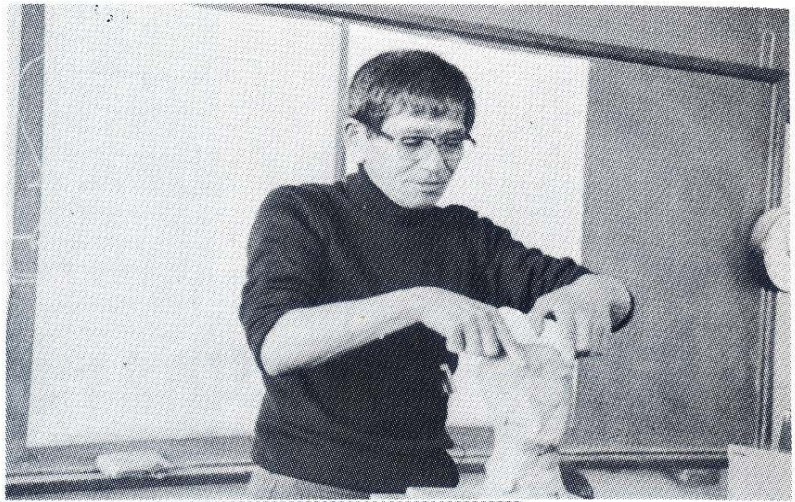
彫刻家・佐藤忠良の彫塑の授業



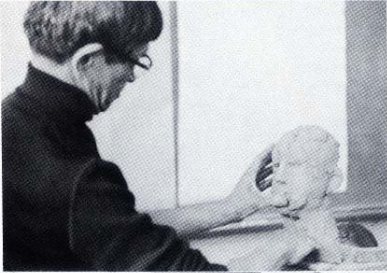




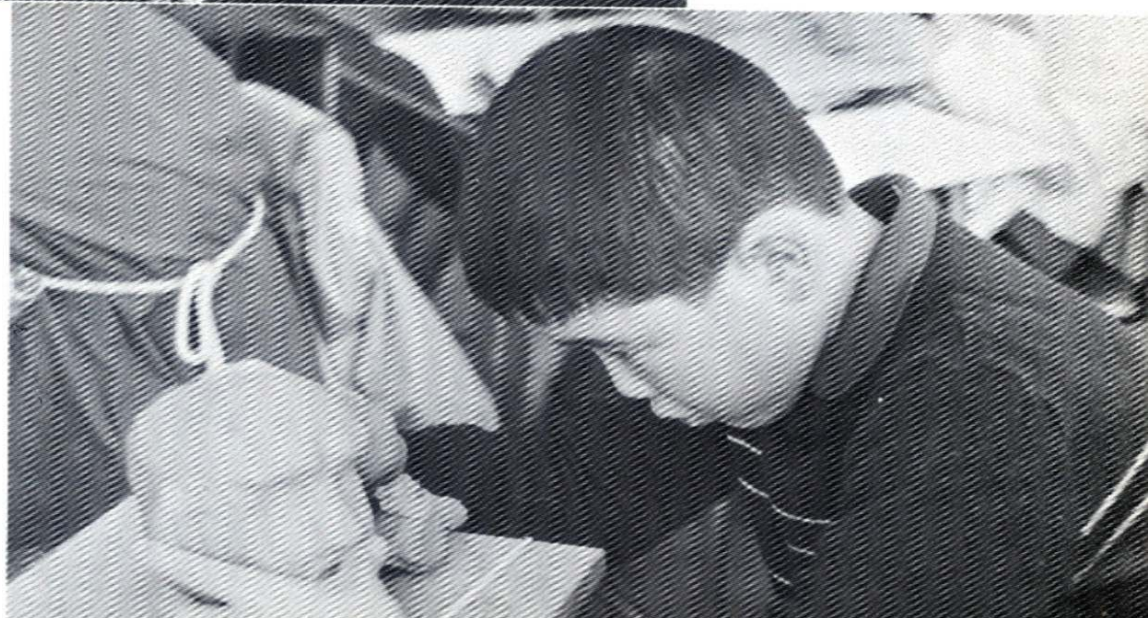
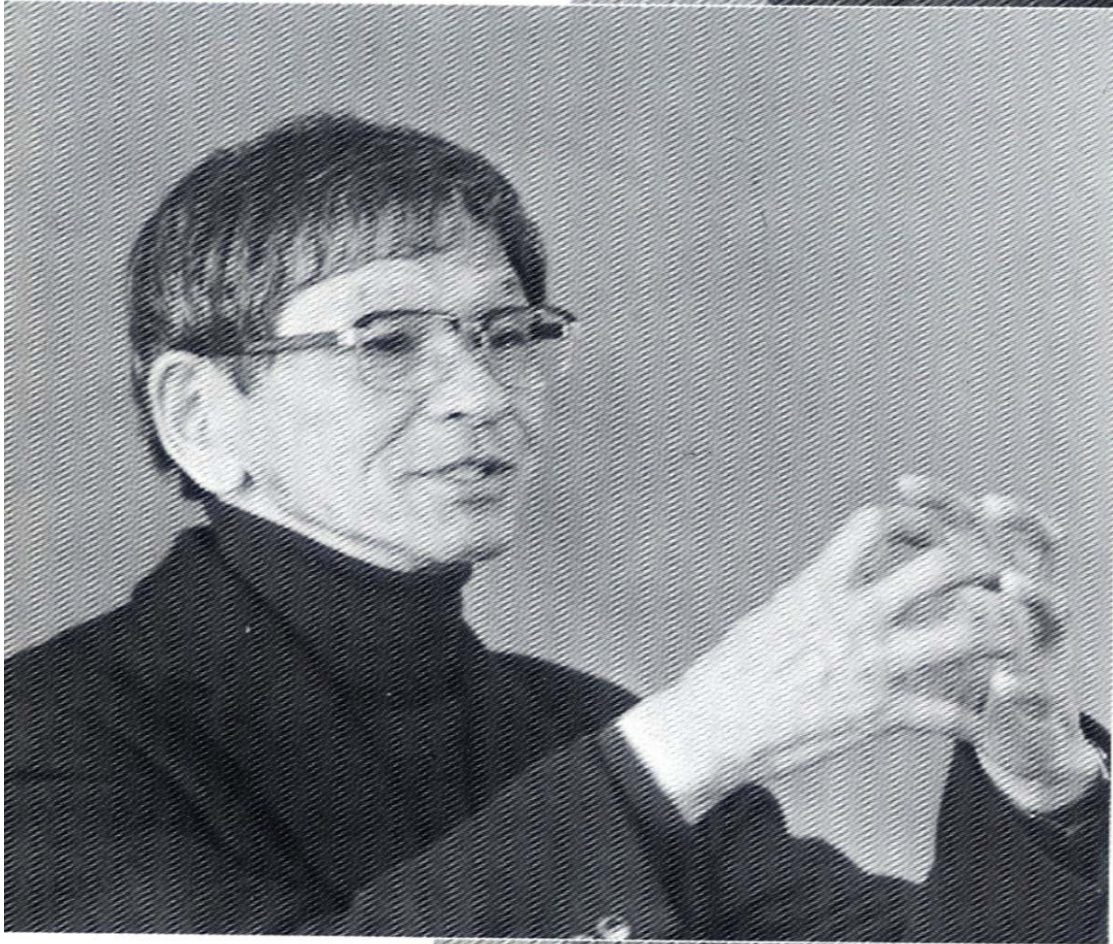














# 教室へやってきた

## 佐藤忠良さん

春日辰夫



### 1 一生に一度の授業

彫刻家・佐藤忠良さんに私のクラスを教えていただけるなんて、考えもしないことでした。その、私にとっては夢のような話がトンと進み、実現したいま、子どもたち以上に私が、目のまえでくりひろげられた粘土の授業に感激をあらたにするのです。

六年まえ、現代美術社が、

「絵がかけなくなって、それほど人生が貧しくなることはありません。手さきが不器用でも、豊かな人生をおくっている人は多いでしょう。しかし、図工科の目的が、人間をつくる——人の情緒や意志を育てていく——ことだとしたら、これは欠くことのできないほど必要なことになります。同時代に生きる人間として、私たちは、ほんとうの意味で、思いやりのある、意志の堅い、そして、創造力のある子に全国の子どもを育てたいのです。この『子どもの美術』がその一助になると私たちは信じています。私たちは心をこめて、この『子どもの美術』を創ったのです」

と、新しい美術の教科書を登場させたときから、この教科書づくり、その姿勢に、私はたいへん興味をもちました。

以来、現代美術社の太田弘さんのお話をうかがう機会が何度もありました。そのつど、太田弘さんの「現代美術社の教科書の最大批判者に、現代美術社自身がならなければならないと思っている」などの話を、たんに教科書づくりの話としてではなく、私の授業、私のサークル活動への大きい示唆として受けていました。

あるとき、太田弘さんとお会いしたとおりに、「いま受けもっている子どもたちは、いまの学校に来てのもち上がり二年目なのだが、何



をやってもうまくいかない。このまま卒業させることになるのかと思うとたまらなくなり、気が焦るのだが、私が焦っても子どもたちはびくともしないので、頭が痛い」ということを話しました。そばにいたサークルの大先輩からは、「まえの学校でやったのとおなじことをしているんだらう。おなじことをしてうまくいくわけではない。子どもたちがちがっているんだから」と言われました。

まったくそのとおりなのです。そうと知りながら、自分を打ち破れないのです。すると、うなずきながら聞いていた太田弘さんがとつぜん、「忠良先生に来てもらったらどうだろう。美術の授業をしてもらうのだ。なにか子どもたちのために役立つのではないか。あなたが困っているとさえ、忠良先生は授業してもいいと言ってくれると思うが」と言うのです。

考えてもみなかったことです。もちろん、子どもたちのためになることはまちがいません。あの子どもたちのかたい心をゆさぶってくるはずです。個展で見たときの、忠良さんの彫刻の一つひとつが頭にうかんできました。またとない話です。さっそくお願いしていただくことにしました。

その後、「一月以降ならいい。ほかでもおなじようにやれと言われると、仕事ができなくなって困るけれど、あなたのところは特別ということだ」と快諾を得たという返事が太田弘さんから来ました。

## 2 せひ「友だちの頭像」の授業を

実現することになって、私がオロオロです。もちろん、彫塑を教えてもらうわけです。いろいろ考えたすえに、粘土でつくる「友だちの頭像」を題材と決め、正式にお願いしました。

題材が決まると、忠良さんは、ご自分の作品集『大きな帽子』を「子どもたちに見せておいてほしい」とわざわざ届けてくださいました。

二年間、つづけて担任しているこの子たちに、私は、一度も粘土の授業をやったことがありません。教材としての粘土に価値をそれほど見いださず、興味ももたなかった私の姿勢の結果でした。だから、頭像をつくることをしたものの、その過程が私にはよく見えません。忠良さんからは、「デッサンは正面だけでなく側面も」というお話がありました。美術サークルのIさんにはデッサンの応援をしていただきました。

教えていただく日は一月二十五日、時間は三〜四校時の二時間ということになりました。

友だちのデッサンだけは前日までのあいだにすませ、当日、粗づくりをしたものを見て教えていただくことに、段取りも決定しました。粘土の経験がほとんどない私には計算ができない、たいへんあぶなっかしい計算でした。

前々日の夜、「授業のことを知ったが、写真を撮らせてもらえないか」という電話が太郎次郎社の編集部からありました。もちろん私が返事できるわけではありません。太田弘さんをおしてうかがうと、「写真を撮ることはかまわないが、小学生に教えるのは初めてなので、忠良先生はともドキドキしている。どういう授業になるかわからない。それでもよければ」ということでした。

忠良さんほどの彫刻家が、ドキドキする。なんて新鮮なのだろう。あのやさしい、あたたかい彫像のヒミツはこの心にあるんだなと思うと同時に、なにかに立ちむかうときの、このドキドキが年ごとに



うすれていつている自分に気づき、顔が赤らむのでした。

### 3 美術はなんのためにあるのか

新幹線の一番外車で来仙された忠良さんに、「お忙しいところ、どうもすみません」とごあいさつすると、「私だけでなく、みんな忙しいのだから。それよりも、子どもたちの役に立つかどうかがとても心配で」と言われて、教室へ。

まず、自作の頭像を示しながら、お話をはじめられました。

「もう少しで七十四歳になります。大学では教えていますが、小さな小さい子とは初めてで、とてもドキドキしています」

「これは孫を作ったものを見てもらうのがいちばんわかってもらえらるだろうと思ひ、持ってきたんです。これは一歳のときで、こっちは一年生になったとき。これは二歳のときで、こっちは五年生になったとき、おじいちゃんが作ったもの。これをまねることはないんですよ。自由に作っていいんですよ」

■忠良さんは自分の作品を見せるためにもってきてくれた。写真集のなかにある忠良さんのまごの赤ちゃんのときのもってきてくれた。本で見たときは、なんとなくかなしそうな目で私を見ているような気がした。でも、本物を見て、かわいくて気にいってしまった。

(佐藤雅美)

「美術の時間が好きでない人いるでしょう。何をかいても、何をたたくともうまくいかなない人がいるでしょう。あまりよくないと言われていやになったり、美術の時間がくるとゆうつになつたりする人

がいるかもしれない。なんで美術の時間があるのか、考えることがあるでしょう。算数やったり、国語やったりするほうが役に立つのにね。こんなに役に立たないものはないですよ。使うもんじゃない。彫刻見なくても、しあわせだなアと死んでいく人はたくさんいるわけですよ。コップとか皿とかは使うもんだね。ところが、あなたたちは絵とか彫刻とか役に立たないものを、幼稚園のときからずっとやっている。つまり、直接、使うものでないものを行っているわけです。だから、バカらしいと言えば、これほどバカらしいものはない」

「では、人間の生活に必要なものだけやっていけばいいか。そうすると、うんとすばらしい大人になるかというところではない。うんとムダをしたほうがいい。うんとむずかしい話になるかもしれないが、みんなはそういうのをやっているわけなんです」

### 4 触覚の芸術

「おなじ美術のなかでも、粘土をいじったり、木を切ったり、石をたたいたりして一つの形を作りだす機会は、絵をかくよりうんと少ないと思います。これは触わるでしょう。触覚の芸術なんですよ。ほかの芸術とのいちばん大きい違いは、触わりながら作っていくことなんです。まえもあれば後ろもある。上もあれば下もあり、底もある。それをひとつの形にしていく。そこがほかの芸術とちがうから、触覚の芸術なのです。」

「人間はいちばん初めに触覚から始まるんです。それなのに、学問が進んできて便利になると、その触覚がまったく必要なくなってしまう。触覚から人生が始まっているのに、だんだん触覚感から遠ざ



かかっていく。あんまり便利なために、小さいときからこのような触覚感がなくなることは、人類にとってふしあわせなことと思うのです。こわいことです」

「できるだけ失敗してみるとういんですよ。いまは、うんと便利になり、なるべく失敗しないような育て方をされているし、それがあたりまえだと思いきこんでいるから、うんと失敗したほうがいい。失敗すれば、足をふまえて考えなおしていくことになる。若いんだから、うんと失敗したほうがいいんですよ」

「粘土はむずかしいでしょう。みなさんは、下手で、純粹で、痛いよう・悲しいよう・楽しいようと叫んでいるものを作っているんですよ。だから、みなさんの作品はおもしろいんですよ。だから、彫刻は、ああだこうだと言わないほうがいいのかもしれないが、いつでも芸術はバクハツだというのばかりで大人になるのは困る」

「いま、廊下で『こんにちは』とあいさつをしてくれた。すぐくうれいね。知らない顔して行っちゃまうより、『こんにちは』とさつてくれると、『こんにちは』と言いたくなる。あいさつって、すぐくむずかしいでしょう。しなければいけないと思いつつ、しそくなうとずうつとしないでしまう。大学生を見ても、あいさつするようになるよ、とつてもちがうですよ。あいさつは人間の社会生活のひとつの約束みたいなもの。このようなものをだいにじにしていけないとね。バクハツばかりしているとね……」

■ちようこくの話とはかんけいがないけど、忠良先生は、「あいさつ」の話をしてくれました。「あいさつはしないで通りすぎられるより、されたほうが気持ちがいい」と。わたしは時々、はずかしくなっ

あいさつをしないときがあったので、これからはどんどんしていきたいと思えます。

(沼田 愛)

「子どものすばらしい作品がルーブル美術館にはいるかというところもはわからない。大人がみんなほめるのに。すぐれた芸術というのは、人間としての教養と知性との組み合わせができたうえで、思想とか哲学とかができて、初めて絵や彫刻が芸術と言われるようになるの。みなさんの芸術ではない。でも、芸術のなかで忘れられているものをもっている。叫びのようなものを。みなさんは下手だから、叫ぶよりしやうがないのです」

「じゃ、ちゃんとした顔を作るとき、気をつけることは、何だろうかということを考えていこうね。たいせつなのは、いちばん初めに話した触覚の芸術だということです。正面から見ても、ななめから見ても色をつけると、なんとなく絵になるが、彫刻はこれだけではダメなんです。後ろからもなにかからも、みんな見なければいけない。それがひとつ。映画のセットで、裏を棒で支えたりしている家なんかあるでしょう。表だけを見ただけでやると、絵と同じペチャッコの彫刻になってしまう。いろんな所から攻めて形にしなければならぬむずかしさとおもしろさが、彫刻にはある」

## 5 なぜ、顔をつくるのか

「なぜ顔をつくるのか、顔に興味があるのか。気にくわない、仲が悪い、いろいろあると思う。人間だから。だけど、話しているうちに、すごくイヤなやつと思っていたのが好きになってしまったということがあるでしょう。顔を見るとね、べつにその人が美人や美男子でなくても、すごくいい人だなと感じたときは、泣いたり笑った



り、怒ったりしている顔の表情のなかで、お互いに認めあって好きになつたりすることがあるでしょう。

顔をいちばん正確につくるのには、石膏をかぶせて顔の形をとればよい。しかし、その顔は気持ち悪くて、死んだ人の顔になつてしまふわけ。だから、顔がいいなァと思ったとき、その人が自分とつきあっているときの目の輝き、がっかりしたときの暗い顔、そして、明るい顔、怒った顔が総合されて、自分の作ってみたい顔になる。

だから、寸法だけ合わせていいわけではない。いま、みなさんは、目・鼻をつけたりするのがせいっぱいだから、作れるわけはないけれど、その人のもっていた、生きていた瞬間だけでなく、つきあっていた過去といま、これからどうなるのだろうということころまで動かないものに入れてしまいたいのが、彫刻の仕事」

「顔にさわってみると、動かないところがあるね。また、動く演技するところもあるの。一軒の家を見るとね、遠くから見ても、だれそれ君の家だとわかる。そういう家でもね、窓を開けてカーテンがふわふわしている家といろいろある。そこに住んでいる人の、生きてくる人の生活の動き、それが、目であつたり口であつたりするわけ。その人でなければならぬ、動かない形がある。動くものになかに、動かないものをみんなもっている。それをどのようにするかということ。仕事がすすんでいったら。ただ顔つくればいいわけではない。しわのゆがみも何もみんな人生。それをつくらねば、まったく意味がないわけ」

■忠良さんは、頭像をつくらせる前に、一時間ほどペラペラいろいろなことを話してくれたが、「できるだけ失敗したほうがいいと思

つてます」ということから、（苦勞をたくさんしろということを書いてあるんだな）と学んだし、頭像のことについては、「上や側面・正面から見ないと、映画のセットのようになってしまふ」ということから、自分たちの頭像を作る時の注意することの一つになったので、ぼくにってはたいへんなプラスになった。「大学生にしか教えていけない」と言っていたが、話上手で、よくわかることを話してくれた。

（佐野健太郎）  
■忠良先生を見た時、忠良先生ってずいぶん目がすんでいる人だなあと思ひました。そして、忠良先生が私たちに説明しました。忠良先生は、きんちょうするより人をよろこばすほうに見えました。忠良先生は、今度、私たちの所にきてくれることでひじょうにきんちょうしていると電話で言われた、と春日先生は言っていました。でも、その様子がぜんぜん見られませんでした。  
（納庄幸子）

## 6 肉体の持つバランスに注意して

「顔もよく見ると、バランスをとっている。どっちかが開いた感じだと、べつのほうはつまっている。人体もおなじ。狂っているように見えても、みんなかならずバランスをとっている。」

どこでバランスをとっているかな、と考えて見ていくと、おもしろい彫刻になると思う。

お腹の大きいお母さんも、そのままではなくて、背骨とおしりでバランスをとっている。木でもなんでも、みんなバランスをとりながら生きていく。こういうのは基本だから、知っていたほうがいい。顔もバランスをとりながら美しさを出している」



■「人は、体のたてにひとすじの線をかくと、それを中心に安定している」。忠良先生はこういって、黒板に二つの絵をかいてくれました。おなかの大きい女の人の絵と、片方の足に体重をのせている人の絵です。

おなかの大きい人のほうは、おなかが大きくて背中はずぐだつたら、前にすぐたおれてしまうから、背中もおなかが大きくなるにつれて内側に曲がっていくと教えてくれました。片方の足に体重をのせている人のほうは、体重をのせている反対のほうに体を曲げれば安定すると教えてくれました。片方の足の場合は、自分でもやるからわかっていたけど、おなかの大きい人はなるほどと思いました。（ちようこくを作るときも、この安定する線をつかっているのか）と思いました。

（沼田 愛）

## 7 ひとつが狂うと、全部が狂う

「みんなのを見ているとね、スイカを半分に分けたような顔になっている。さっき言ったように、耳をどこにつけても輪郭には変わりはない。耳をまえのほうにつけると、アゴもそれによってまえになるから、どうしてもアンパンのようになる。つまり、自分のつけた耳に合わせるから、どうしてもまえにまえにとくるの。正面からばっかりやっているから。

どうせ仕上がったって売れやしないんだから、うんと失敗しているの。でも、顔って気になるのね。

目をひっこめて鼻を出そうとする。すると、目じりが出て、額が出て。最初まちがうと、ぜんぶ狂っちゃう」

■私は、「耳の話」と「額の話」がよかったです。私もみんなもだけど、耳を前に書きすぎるし、耳の手前のでっぱりも書いていませんでした。これから、そのところを注意して書きたいと思います。額は、よく考えてみますと、男のほうが広くて女のほうがやや小さいです。いままで全然気づいていませんでした。（押野綾恵）

■ねんどで友達の頭像をつくるなんて初めてだったから、最初どうやって手をつけたらいいかわからなかったけど、説明を聞いているうちになんとかできるようになりました。横から見てもまっすぐにならないようにと言われたけど、私のはまっすぐのままでした。ただ、鼻の部分がでていただけ。ほったの部分がべっちゃんだったので、まるみをつけました。（山根由希子）

## 8 器用すぎる手はだめ

「これは鉄のヘラ。ぎざぎざつけて、わざと素材きを出したりするの。上手になると、手がさきに走っていき、ちょっと感動しないものを作るので、こんなのを使って気をつけているの。

これは「つげ」の木のもの。これは竹、自分で作ったもので、切ったりけずったりする。みなさんはなくたっていい。

この小さい角材も道具。半世紀もやっている、うまくなりすぎてしまうから、なるべく自分の手を不自由にしようとして、これだけたいたりけずったりする。手はすべりすぎて作るものが工芸品になってしまうから、器用になった手なるべく不自由に作る道具なの。

えんぴつも、2Hか4Hなどを使ってかくと、濃いものでかいているうちは自分の絵に酔っていたところがはっきりしてきて、酔う



ことができなくなってしまう。

これらの道具も、使っているうちに手と同じになってしまふ。そこがむずかしいところなの」

『少年の美術1』（現代美術社）17ページにある粘土でつくる頭像の制作過程を見せて歩きながら、「このとおりやれというのではありませぬよ。しかし、これがいちばん基本的なものです」と話された。

## 9 頭像をつくってみせる

① 粘土を少しずつ重ねていく。

② シンを入れ、また粘土をはりつける。

「こっちをまえにするね」

「彫刻は面だ面だ、というが、面をわかるまでには時間がかかる」

「この段階で、彼は丸い顔だとか細い顔だとかを決める。みなさんは、この段階にくるまえに、すぐ鼻をつけたり口をつけたりする。

役者もおなじで、テレビに出てテレビ演技をするから、みなおなじ

になってしまい、役者でなくなってしまう。全体の動きを見るものなのに、テレビはアップで出るから、みんな演技が下手になる。こ

こでは、その人の全体をとり、それでもその人がわかる」

「頭を上から見ると、後ろがいくらか開いた形になるが、みんなのは逆で、まえが開いている」

③ ヘラを使いあごをとる。

④ 耳の場所を決める。

⑤ 首の後部をけずり、「ここはわりと細く締まっている」。

⑥ 額をつくる。

「みんなのは平べったくなっているが、額はそうではない。男と女では少しちがう」

⑦ 目と鼻の位置をだいたいとる。

⑧ また、粘土をはりつけていく。

⑨ 鼻をつける。

⑩ 側面を見せて、耳をつける。

⑪ あごを補いながら、口をややうきだたせる。

⑫ また、粘土をはりつけていく。

「耳を見るとね、みんなは耳のへりだけ作ったのね。でも、耳はそうではない。なかの部分が押しあげている」

「口は線ではない。上唇と下唇とが、両方から皮で合わさってくる」

「これで、この人の形が決まり、このへんからこまかいところにはいる」

「目鼻を早くつけるとね、アクセサリーみたいなものがつくから、

それが災いして、どうしても基本的なものがうまくいなくなる」

⑬ 鼻の部分をけずる。

⑭ ほほに手を入れる。

⑮ 目をつける。

「まゆ毛もよく見ると、ターンしているところがあり、そこは毛がかさなって濃くなっている」

「このように山があり、沢がある。彫刻とはそういうものなの。山があり、それがかみ合って沢ができる。波がしらみたいになっていると、彫刻にならなくなる。こういう順序でやると、みなさんのように平べったくはならない」

⑯ 耳を前方につけなおしてみせて、「みんなはこうでしょう」。



すると、あごもまえに出る。すると、このように平べったくなるの」。

このあと、少しの時間、子どもたちの制作はつづく。忠良さんは見て歩きながら、一人ひとりに声をかける。しかし、「一回、手を入れると、最後まで手をつけないといけないから」と、手は少しもつけない。

そして、「いままでのいろんな話が、あとでひとつでもみなさんの役に立てばさいわいです」と、二時間の授業は終わる。

■忠良先生がねんどで顔を作った。いそいで作ったのに、すごくうまくできていた。はじめはどんくっつけていって、はじめに顔のりんかくとかを作って、次にほったのふくらみなどを、ねんどをくっつけてのびしながら作った。細かい所はあとに作ると思っていた。鼻のふくらみとか目のでっぱりとか、とてもうまくいった。忠良先生の作品の見比べながら作った。

(大宮孝文)

### 10 「ちようこくはまかせなさい」と忠良さん

忠良さんは、「彫刻には、けずって作っていくものと、はりつけて作っていくものがあり、粘土ははりつけるほうにあたる。だから、粘土は無限だ」ということを言われました。私が途中まですすめた粗づくりは、粘土を使いながら、けずる彫刻と同様な仕事をさせていたということになります。しかも、制作の基本過程も教えずにやらせていたのですから、子どもたちが困ったのはむりもありません。

しかし、いや、だからと言ったほうがいいのかもしれない。子

どもたちは、むずかしいと思われるお話を、あまり苦にせず受けとめたようでした。一つひとつが新鮮であったからでしょう。お話のあいだも、自分の作品からなかなか手をはなさない子どもたちの姿を見て、ちゃんと聞いてくれればいいのにと何度も思いましたが、感想文を読むと、私が驚くほどきちんと聞いているのがわかるのです。

■忠良さんに教えてもらって、「さすがだな」と思った。「しょっかくの芸術」という言葉は、絵は見てもかきもの、ひらべたいからかたん。でも、ちようこくは、まるみなどもだすからむずかしいと思った。「しょっかくの芸術」はなにもやくにたたないといったが、ほんとうにそうかなあと思った。

忠良さんのつくった頭像はすごかった。表情がとてもよい。あかちゃんとかいろいろあった。頭像は、みな、中がくりぬかれている。忠良さんがねん土でつくった頭像は、モデルはないけど、横向きなときはスイカ型にならないようにといていた。約20分でできあがった。忠良さんがつくったのは、はじめは大きっぱにつくり、だんだんに人間らしくなっていました。やっぱり世界的に有名な人だなと思った。

ぼくは、忠良さんにあわなかったら、音楽とかもいいかげんにやっていたと思います。なんでも集中してやることのむずかしさがわかったような気がします。

そういう人あって、もっと何かを勉強したいと思いました。

(菅原 進)

■私は、忠良さんが来て授業をしてくれるのを、今か今かと待って



いました。二十五日、忠良さんとの授業の日。私は、朝早くきました。ねんどをねって、あら作りをしました。ねんどをねるのは大変でした。三時間目の授業が始まり、忠良さんが来ました。(どんな授業になるのかな?)

最初は、頭像を作る時の表じょう、目、鼻、口の位置などの話を、三十〜四十分しました。その話がとてもおもしろいので、しんけんに聞いていました。

忠良さんの話が終わると、あら作りから、形を少しずつ整えていきました。(思ったよりうまくいってるな)と思っていたら、忠良さんに、「上から見ると、ひたいの部分は( )じゃなくて、( )というふうになっているんだよ」と教わりました。少し直してみる、前よりも形が整いました。(さすが、プロだな)と思いました。鼻をつまみ出して、ほったのふくらみと、目のひっこみの表じょうを出しました。忠良さんがお話をするたび、顔の表じょうを出すにはどういうふうにするかわかってきました。

忠良さんとの授業をやって、新しい何かを身につけられました。とてもうれしいです。本当にありがとうございます。

(寺井 愛)

■今日は、あの、佐藤忠良さんが来る日だった。どんな人かなと考  
えながらねんどをこねた。忠良さんがくるころになると、人がいっ  
ぱいきてきんちょうしてきた。

いよいよ、忠良さんの登場。ふつう、芸術家っていうのは暗いイ  
メージがあるんだけど、忠良さんはあかるそうだった。

さっそく、話が始まった。芸術家はいつも手を不自由にしている  
ことや、北海道のこと、体のバランスのことなどを聞きながら、忠

良さんは世界的に有名な人なのに、ぜんぜん気どらなくていい人だ  
なあと思った。あと、道具などを教えてもらった。

そして、一番楽しみにしていた実えんをしてくれた。ねん土をた  
て長につき重ねて、だいたいのりんかくをとった。そして、りんか  
くが仕上がった時に鼻、耳などをつけ、口や目などをかんとんにつ  
けて終らせた。

忠良さんがちょっと見回って、四時間目が終わった。

サインをねだってもすぐしてくれたことから、やさしいんだな  
あとと思った。

やっぱり、すごい人ほどいい人になるんだなと思った。

(横田由樹)

■一月二十五日に、佐藤忠良先生が来ました。私は、ずーっと、  
(佐藤忠良っていう人、どういう顔しているのかな、どういう人な  
のかな)といういろいろ考えていました。

三時間目になって、忠良先生がやっと来ました。私の想像とはぜ  
んぜんちがう人でした。思っていたのより少しやせていて、背が高  
い人で、おしゃべりで、楽しくて、いがいにおじいちゃんでした。

私は、いつもオフォーコースのことしか頭にはなくて、芸術のことな  
んかさっぱりわからないので、忠良先生が来る前にかんとんに作っ  
ておいた友達顔を、忠良先生の話とあわせてみると、全部ちがっ  
ていたのです。

上から見ると、○ こういうふうになるのが、○ になって  
いたり、耳が前すぎたり、顔の形がひらべったくなったり、目の  
さきのまじりがぜんぜんなかったりして、本当に私はダメだと思  
いました。



これから、忠良先生におしえてもらったことを生かしていきたいです。  
(青麻悦子)

どの感想を見ても、子どもたちにとって充実した一日だったことがわかります。いま、卒業をまえにして、クラスの思い出を木版画でカルタにすることにし、その作業にはいっています。子どもたちの作った、カルタのよみふだの⑤は、「ちょうこくはまかせなさいと忠良さん」でした。

授業のあとで、「きょうの報告を書くことになるかもしれませんが、なにか注文ありますか」とおたずねすると、忠良さんは、「何もありません。ただ、あなたとの一回だけの約束だったということほかならず入れてください。ほかからも話があると、仕事にならないから」と、笑って話していました。

ほんとうに、私も子どもたちも、その一回だけが私のクラスであ

ったことをしあわせに思わなければなりません。  
(上野山小)

\*佐藤忠良さんがこの授業で使われた教科書は、『少年の美術1』（佐藤忠良さんほか著）です。入手されたいかたは、現代美術社（東京都港区東麻布1-26 赤羽橋ビル・☎03-5851-8591）へお問い合わせください。

\*また、この原稿は、雑誌『ひと』（太郎次郎社）、86年5月号より転載させていただきました。  
太郎次郎社に厚く御礼申し上げます。

